スピーチの延長としてのディベートの実践

持　山　育　央

【抄録】本校で２単位の国語表現が高校３年生に導入されて以来、「書くこと」・「話すこと」の２本柱で授業が行われてきた。「話すこと」では、自分の持っている意見を３分程度にまとめ、クラスの前で主張する「スピーチ」が行われている。本年度は「スピーチ」の延長として、与えられた題材に対する意見を集団でまとめ、それをもとに討論し合う「ディベート」を実践した。

【キーワード】ディベート・定義・手順・判定

１．はじめに

本校の高校３年生での国語表現の授業は、「書くこと」と「話すこと」とに大別される。国語表現は週２単位で、その内の１時間を「書くこと」、もう１時間を「話すこと」に使われる。「話すこと」はこれまでスピーチを中心に行われてきた。スピーチの授業は、説明・題材探し・草案作成を含めて、クラス45人が２学期の後半で全員終了する。従来は、その後、２回目のスピーチに入ったり、１回目の良いものをアンコールスピーチをしたりという具合いに残りの時間が使われてきた。

スピーチの授業で気が付くのは、生徒が色々な問題意識を持って生活しているということである。しかしながら、高校の授業では、その問題意識を自ら発表し、討議する機会が少ない。

そこで、本年度はこれまでに行われてきたスピーチの延長として、ディベート（討論）を試行してみることにした。

２．ディベートの定義

ディベート（Debate）は「討論」と翻訳される。自分の意見を主張し、他の様々な意見と共に整理・処理していくことである。そこで、現代の社会では、多様な考えに対して柔軟に対応していくことが要求される。そこで、岡本明人『授業ディベート入門』を参考に、ディベートを次のように定義することにした。

「ディベート」という言葉は、あまり聞き慣れていない人が多いと思います。「ディベート」とは、ある一定のルールに従って行う討論授業のことです。しかし、「ディベート」＝「討論」と考えるのは、少し違っています。「ディベート」は、“一定のルールに基づいて行う討論ゲームである。”と定義されます。この定義で、一般的な討論とディベート的討論との違いが分かったと思います。ディベートは討論の一種です。しかし、普通の討論と決定的に異なる点があります。それは、ディベートはゲームとしての討論だという点です。

３．ディベートの手順

ディベートは、立論・反対尋問・最終弁論・判定の順で行う。詳細は以下のようにした。

○作文…（前の時間）→肯定側・否定側両方の立場に立って、それぞれ400字程度で意見をまとめる。
①チームごとの立論…（５分）
　→リーダーを中心に意見をまとめる。
②肯定側「立論」……（３分）
　→代表者がチームの意見を発表する。
③否定側「立論」……（３分）
→反対側のチームは反対意見を考えながら聴取する。
④作戦タイム……（２分）→反対意見をつくる。
⑤否定側「反対尋問」（３分）
　→第１回目の反対尋問（質問）をする。
⑥肯定側「反対尋問」（３分）
　→第１回目の反対尋問（質問）をする。
⑦作戦タイム……（２分）
　→第１回目の尋問を踏まえた反対意見をつくる。
⑧肯定側「反対尋問」（３分）
　→第２回目の反対尋問（質問）をする。
⑨否定側「反対尋問」（３分）
　→第２回目の反対尋問（質問）をする。
⑩作戦タイム……（３分）
　→チームごとの最終的な意見をまとめる。
⑪肯定側「最終弁論」（３分）
　→全ての意見を踏まえた最終弁論を行う。
⑫否定側「最終弁論」（３分）
　→全ての意見を踏まえた最終弁論を行う。

⑬判定→判定者は、判定・コメントを記入する。
⑭講評→教師より全体を通しての講評をする。

また、本年度は初回ということで、その場限りの即興的で表面的な議論で終わることを少しでも避けるために、前時限で作文をすることにした。この作文は、論題に対して、肯定する意見と否定する意見をそれぞれ全員が400字程度にまとめて書く。自分が、どちらの意見を持っていても、必ず両方の立場に立って作文をする。そいて、本当の自分の考え…肯定側か否定側か…に印をつける。

今回はこの作文を、チーム分けをする資料及び、生徒の立案の基盤にした。

4．ディベートの判定

ディベートでは、賛成側と反対側とで討論している過程を、他の参観者が全員判定する。判定は、次のような観点で行う。

観点は、立論・質疑応答・最終弁論・資料・グループの協力の５つである。それぞれに設けた下位10項目について、３点（たいへんよい）・２点（ふつう）・１点（よくない）、30点満点で採点する。その合計を以って、勝敗とする。判定は、自分の意見が賛成か反対かに関わらず、どちらのチームの意見・答弁が説得力があったかを客観的に判断する。（表を参照）

最後に必ず、両チームへのコメントを記入する。

肯定・否定両チームは「立案用紙」、判定者は「判定表」を持ってディベートに臨む。

5．役割分担

ディベート実践の際に、生徒の中から次の役割を決めておくと良い。

・司会者（１名）→→→「ディベートの手順」に従って、司会進行を行う。
・時間係（１名）→→→タイムキーパー。時間がきたら司会者にそれを告げる。

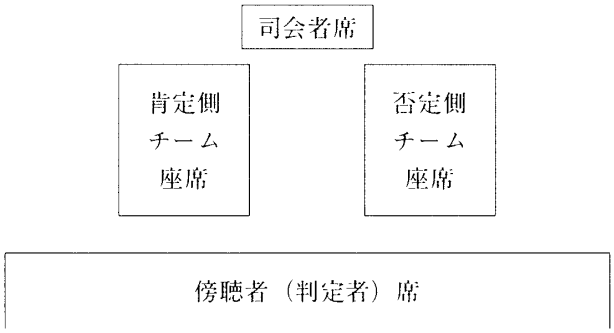
司会者は、発言の途中でも、時間を区切って次の段階に移らせる。

・記録者（２名）→→→答弁の記録を簡潔に行う。

今回の実践では、授業時間の都合から、司会者・時間係は教師が兼任し、記録はテープレコーダーで行った。

6．教室の形態

教室の形態は、以下の図のようにした。肯定側チーム・否定側チームは向かい合うようにし、それ以外の生徒は教室の後ろの方に傍聴者（判定者）として討論が見渡せる位置に座る。傍聴席が窮屈だが、普通教室で充分実施できる。



7．グループ分け

今回実施したクラスは、全員で44名（男子20名・女子24名）である。１チームは５名程度が適当と考え、８チームに分けることにした。本来は、無作為にチーム分けをするのが良いと考える。

しかし今回は、先にも触れたが、実施の前時限での作文を元に、肯定側・否定側のバランス、男子・女子のバランスを考えて、作為的にチーム分けをした。

また、次の時間の担当が決まっているチームはその時間までに、チームリーダーを決めておき、立論の方向を話し合っておくことを指示する。

ゲーム性を重視するため、前時限の作文が終わった段階で、チームの代表者のじゃんけんによって、肯定側・否定側を決定する。

8．論題について

全員の「スピーチ」が終わった時点で、次の授業から取り組むディベートの説明をした。そして、スピーチでの問題意識を期待して、ディベートでの論題を募集した。生徒から出された論題は次の通りである。

①学校生活
　・週休２日について。・本校と他校のちがい。
　・浪人について。・日本の教育制度について。
　・学校における英語学習について。
　・国語表現の必要性。・遅刻について。
　・名大附属の良いところ悪いところ。
②友達・男女関係の問題
　・友情について。・親友について。
　・男女交際について。・高校生の恋愛について。
③時事（政治）・社会問題
　・自民党対共産党。・海外企業の買収。
　・環境保護、エコロジーについて。
　・グリーンピースについて。
　・ロシアの核廃棄物の日本海投棄について。

ディベート判定表

199　　年　　月　　日（　　）　第　　限実施
判定者　3年　　組　　番　氏名

1．今日の論題（テーマ）は……

2．肯定（賛成）側メンバー☆☆☆

3．否定（反対）側メンバー★★★

	判定の項目	肯定側	否定側
立論	①立場は、はっきりしているか。		
	②筋道は、通っているか。		
	③話す速さや声の大きさは、適切か。		
質疑応答	④質問は、筋道が通っているか。		
	⑤応答は、筋道が通っているか。		
	⑥質問や応答を、活発にしているか。		
最終弁論	⑦立場は、変わっていないか。		
	⑧質問や応答を、踏まえているか。		
	⑨話す速さや声の大きさは、適切か。		
協力	⑩グループは、よく協力し合っているか。		
総合判定	①～⑩の合計得点を記入する。→→→→→→		
コメント	肯定側へ		
	否定側へ		

・政治改革について。・PKO 問題について。
・日本の減反政策について。
・日米問題。・米の輸入問題。
④倫理・思想問題
・資本主義と社会主義。・尊厳死について。
・独裁政治と多数決制政治。
・自由の限界はいったいどこか。
（表現の自由・思想言論の自由）
・お金の使い方について。・脳死について。
⑤その他
・人は家族なしで他人の中で生きていけるか。
・教師のあり方について。
・日本人の権利意識について。
・高校生の喫煙と飲酒について。

生徒の問題意識は多岐にわたっていて、スピーチの論題と同様、興味深いものを得ることができた。しかし、抽象的なものが多く、ディベートの論題としては練り直さねばならぬものが多かった。本年度は、論題を教師が用意することとした。

9．本年度の実践

【第１回論題】　『学校に制服は必要ない。』

第１回目の論題は、「制服」問題を取り扱った。本校では、数年前から生徒会執行部を中心に制服改正運動が行われていた。そして、その結果、昨年度女子の夏服が改正された。制服改正運動の際、配布プリントやアンケート調査などを通して制服の意義やその必要性を問われてきたところである。そこで、この論題を取り上げた。

まず、肯定側「制服は必要ない」・否定側「制服は必要だ」両方の立場に立って各400字程度の作文をした。参考までに、生徒（40名）の意見は、

肯定側……20名　　否定側……20名

であった。興味深いことに、肯定・否定半々の意見であった。

この立場を元にチーム分けを教師が作為的にする。男女のバランスを考えながら肯定・否定の意見が均等に入るようにした。各チームの主張の概略は次の通り。

（肯定側「必要ない」）
・表現の自由が守られていない。
・個性がなくなる。
・気候により調整が難しい。
（否定側「必要だ」）
・私服はお金がかかる。貧富の差や競争が生まれる。
・学校の統一性がなくなる。

ディベート終了後の判定では、僅差の点数をつける判定者がほとんどで、初回ということもあってか慎重に判定をしている様子が伺えた。結果・コメントは次の通りであった（判定者は33名）。

肯定側……12名　　否定側……21名
（否定側チームの勝ち。）

＜判定者からのコメント＞○肯定側へ・●否定側へ
○質疑応答と比べて、立論・最終弁論に説得力が感じられたので、良い印象だった。
○自分の意見に自信を持って答えた方が良い。
○メモを取り、活用しているところが良かった。
○協力の姿勢が弱い。
○順序・論理をきちんとしてから話すと良い。
○最終弁論では、結論だけがはっきりしていて、中味がよく分からなかった。
○リーダーの意見が強すぎて、他の人の意見が弱くなってしまった。
○相手の質問に答えていなかった。
●一貫して内容が個人的な考えに基づくものであったので、社会的なことも話題に加えると良いと思う。
●質疑に様々な例を混じえて分かり易かった。
●相手側への質問や・相手側の意見に対する応答にもっと力を入れると良い。
●話し方を丁寧に。
●グループがよく協力している様子が伺えた。
●傍聴者の興味を引くような意見が述べられていたので、有利な立場に立てたと思う。

初めてのことで、判定者にも戸惑いは隠せないが、要領を得ていないだけに見たままの感想をコメントしていたようである。また、自分の立場とは関わりなく客観的に判定していることがコメントから推測できる。「相手側の意見も取り込み、筋道の通った意見」が、良い評価を得ている。また、話の内容だけでなく、チームの協力や意見の発言の仕方も判定のポイントになることが指摘されている。

【第２回論題】
『この場合、産婦人科医は手術を行うべきである。』

第２回目は「妊娠中絶」の問題を取り扱った。現代教育科学（1993年11月号）での大鐘雅勝氏の実践を参考に、河野美代子『さらば悲しみの性』高文研の中で紹介されている事例についての論題とした。

事例……妊娠した18歳の女性が来院した。「産んで育てます」という彼女だったが、３日後に来院した時には「やはり産めません」と言って泣きだした。理由は、相手がダメだと言うからである。相手の男性は、

車や背広などのローンのために妻と子どもを養えないと言う。かといって、妻を働かせるのは男がすたるとも言う。

この事例を元に、上記のような論題を設定した。また、資料として①（財）厚生統計協会「国民衛生の動向1993年」と、②北村邦夫・JUNIE 編集部編著「ティーンズ・ボディーブック」を配布した。資料①は人工妊娠中絶の実態（手術数の推移や母親の年齢分布など）、資料②は手術方法や危険性などについてが主な内容になっている。

第１回目と同様、準備時に肯定側・否定側の両方の立場に立って作文をした。生徒40名の意見は、

肯定側……17名　　否定側……23名

で、やや否定側が多い結果であった。

これをもとに担当チームが立論を行い、１週おいた次時にディベートを実施する。

手順と共に、意見を追って行きたいと思う。（前述３．ディベートの手順参照）なお、肯定側・否定側の順序が入れ替わっている。

＜①否定側立論＞「手術をするべきではない。」
・中絶手術を軽々しく考えている。
・不妊の可能性もある。
・女性の体を最も大切に考えるべきである。
・男性の意識を変える良い機会である。
＜②肯定側立論＞「手術をするべきだ。」
・生まれてきた子がかわいそうである。
・子どもの命よりも車の方が大切だという男性は、父としての責任がとれない。
・女性自身が手術をしてほしいと言っている。
＜③肯定側反対尋問＞
・今の中絶手術は安全だ。
・ローンがあって生活が苦しい。
・「女性の体を大切に」と言うが、しっかり話し合って決めているのではないか。
＜④否定側反対尋問＞
・子どもが生まれてみると、自分の子ということで意識が変化するのではないか。
・「男性の希望」はあるが、男性は経済的援助をするべきで、手術をするのは女性である。
＜⑤否定側反対尋問＞
・決断が早すぎる。
・周りからの援助が得られるかも知れない。
・中絶手術には失敗例もある。
・男性の意識変化に賭けてみたい。
＜⑥肯定側反対尋問＞
・男性の意識が変化するのは希望であって、変化しなかった時には生まれてきた子どもがかわいそうである。
＜⑦肯定側最終弁論＞
・当事者が泣くまで話し合って決定した結果である。
・男性は現実的で、女性を働かせるとは思えない。
・希望だけ述べているのではいけない。
・安全のために早く手術をするべきである。
＜⑧否定側最終弁論＞
・女性が泣いて訴えていることからも、まだ話合いが必要である。
・避妊など計画的にしていないことからも、知識不足である。
・男性は忘れてしまうが、女性は心の傷を一生忘れない。
・中絶手術は「えぐる」手術である。
・お腹の中の子どもも人間である。命の問題がある。

今回は、相手の意見を意識しながらの答弁が目立った。１回目の反省にもあった「相手の意見を取り入れながら」ということを実行していると思う。「立論」が「質疑応答」を経ることによって、徐々に深まりと広がりを見せていると言える。最終的にその意見をまとめあげることが、なかなか難しいようである。

このディベートの結果、判定は（判定者33名中）

肯定側……15名　　否定側……18名

（否定側チームの勝ち。）

となった。ディベートをした生徒たちの反省は次の通りだった。
・意見を一つにまとめて話すのがいかに難しいかがよく分かった。
・意見がまとまっていても、話すとなるとうまくいかない。
・この問題については、しっかり考える必要があるので、やって良かったと思う。
・もっと新しい意見をどんどん出し合いたかった。
・内容が理想的になってしまったが、もっと現実的なものになると良かった。
・作戦タイムが短すぎて意見をまとめることができなかった。

10. 反省と今後の課題

高等学校では、授業の中で生徒が自分の意見を主張する場面が比較的少ないと思われる。本校で実施している国語表現の「スピーチ」は、生徒が自分が今一番強く思っていることを題材に意見を主張する、ひとつの機会である。「スピーチ」の授業を担当しての感想は、すべての生徒が話したいことをたくさん持っていて、機会さえあれば自分の意見を主張することができ

るということである。

スピーチの延長としてのディベートの実践は、個人の意見から集団の意見へ、また即時的にまとめなければならないなど困難な点は多かった。しかし、是非身につけてほしい力だと思う。

ディベートの場にいる生徒は、必ず何等かの役割を持ち、ディベートに関わっている。初めての実践で成功した点は、生徒全てが論題に対して自分の意見を持って臨むと言う意味で、前時に行った作文はである。

はじめにも述べたように、高校3年生がこれから臨んでいく大学や社会生活の中で、自分の意見を主張し、同時に相手の意見も理解し自分に取り入れていく能力は、必要不可欠である。生徒の反省にもあったように、意見は持っているのだがそれが言葉になって出てこない、という課題もある。どのような指導が適当なのか。

今後も実践を積み重ね、方法を確立していくと共に、「高校3年生のディベート」として、どんな力を育てていったら良いのかを模索していくことが、今後の課題である。

11. 参考文献

・現代教育科学1993年11月号　明治図書